第二十六回 仙台青葉能

喜多流 能
鬼界島（きかいがしま）
人間国宝 友枝 昭世

和泉流 狂言
佐渡狐（さどぎつね）
人間国宝 野村 万作

喜多流 能
源氏供養（げんじくよう）
佐々木 多門

「鬼界島」
友枝昭世 所演
石田　裕 撮影

とき 2024年5月18日(土)
開演 13:30　**開場** 12:45

ところ 電力ホール（仙台市青葉区一番町3丁目7-1）

入場料 S席 11,000円　A席 8,500円　B席 6,500円　学生席 2,500円（全席指定・各消費税込）

一般発売 2月15日(木) 10:00～

※未就学児入場不可。　※学生席の販売は河北チケットセンターのみ。公演当日25歳以下が対象。公演当日学生証をご持参ください。
※車椅子で鑑賞をご希望のお客様は河北チケットセンターまでお問い合わせください。　※公演中止の場合を除き、お客様都合による払い戻しはできません。

プレイガイド 藤崎、仙台市市民文化事業団（日立システムズホール仙台、仙台銀行ホール イズミティ21）
チケットぴあ https://t.pia.jp/（Pコード：524-308）、ローソンチケット https://l-tike.com/（Lコード：21970）
河北チケットセンター☎022-211-1189（10：00～14：00　土・日・祝日休）

お問い合わせ 河北新報社事業部　☎022-211-1332（10：00～17：00　土・日・祝日休）

■主催／仙台青葉能の会、(公財)仙台市市民文化事業団、河北新報社　■共催／電力ホール
◆協力／仙台市博物館、中尊寺、(公財)瑞鳳殿、NHK仙台放送局、伊達家伯(かはく)記念會、白石市古典芸能伝承の館「碧水園」
◆後援／宮城県、仙台市、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、仙台市能楽振興協会、tbc東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ
khb東日本放送、Date fm、松井建設㈱東北支店

※伊達家より家紋使用許可済み

※伊達家より家紋使用許可済み

第二十六回 仙台青葉能

献香之儀

仙台伊達家十八代当主　伊達　泰宗

シテツレ・康頼　佐藤　陽
シテツレ・成経　佐藤　寛泰
シテ・俊寛　友枝　昭世

開演　午後一時三十分

一時四十五分

喜多流

能　鬼界島（きかいがしま）

ワキ・赦免の使　宝生　常三
アイ・船頭　高野　和憲
後見　中村　邦生
友枝　真也

大鼓　國川　純
小鼓　鵜澤洋太郎
地謡　塩津　圭介
内田　成信
金子敬一郎
大島　輝久
友枝　雄人
大村　定
香川　靖嗣
粟谷　明生
笛　松田　弘之

――休憩　二十分――

和泉流

狂言　佐渡狐（さどぎつね）

奏者　野村　万作

越後の百姓　破石　晋照
佐渡の百姓　飯田　豪
後見　破石　澄元

喜多流

能　源氏供養（げんじくよう）

後シテ・紫式部の霊
前シテ・里女　佐々木多門
ワキ・安居院法印　宝生　常三
ワキツレ・従僧　梅村　昌功
後見　塩津　哲生
大島　輝久

大鼓　國川　純
小鼓　鵜澤洋太郎
地謡　谷　友矩
塩津　圭介
友枝　真也
佐藤　陽
金子敬一郎
狩野　了一
長島　茂
内田　成信
笛　松田　弘之

終演予定　午後四時五十分頃

能「鬼界島」（きかいがしま）

秘密裏にすすめていた平家転覆の計画が露見し、捕縛された面々のうち、俊寛僧都・丹波少将成経・平判官康頼の三人は、はるか南海の孤島・鬼界ヶ島に流罪となりました。

成経・康頼の二人は、日頃崇敬している熊野社を鬼界ヶ島に勧請（神を分社すること）をして、今日も社に詣でていると、俊寛が水桶を持って迎えにきます。酒を持ってきたと言いつつ、水を酌み交わしてありし都の日々を懐かしみ、身をかこちあう三人。

そこへ、中宮（清盛の娘・徳子のちの建礼門院。高倉天皇の后）の御産の無事を祈るために出された大赦令（罪人の罪を減じる法令）の赦免状を携え、都から使いが島へ到着します。使いは、成経と康頼の帰還を赦す旨を伝え、書状を成経に渡します。成経が読み上げる赦免状に、自分の名が漏れた俊寛は驚いて何度も状を見返しますが、俊寛の名はついに見つからず、絶望して深く悲嘆に暮れます。

島より出立の時刻となり、成経・康頼は促されて船に乗り込みます。俊寛はそのあとを追って、康頼の袂（たもと）や、船の艫綱（ともづな）に取りすがり、身を波に浸しながら乗船を嘆願しますが、船は出航してしまいます。船を見送りながら、俊寛は絶海の孤島にただひとり残されるのでした。

狂言「佐渡狐」（さどぎつね）

年貢を納めに都へ上る途中で道連れになった佐渡と越後のお百姓。佐渡に狐のいるいないを巡り、賭けをすることになったが、実は佐渡に狐はおらず、狐を知らない佐渡のお百姓は奏者（取次の役人）にワイロを使い味方についてもらう。しかし奏者の「佐渡に狐はいる」という判定に納得のいかない越後のお百姓に、狐の形格好を問いただされ…。

越後のお百姓の追求に必死で答える、佐渡のお百姓と奏者の連携プレーが見どころです。

世相を風刺しつつ、中世の人々のたくましく生きる姿が笑いの中に描かれた狂言です。

能「源氏供養」（げんじくよう）

安居院法印が石山寺の観音に詣でると、そこへ紫式部の霊が現れます。生前に書いた『源氏物語』の供養を怠ったために、虚構の文学を書いて人々を惑わした罪を受けて、浮かばれずに苦しんでいます、と紫式部の霊は訴えます。法印に物語の供養を頼み、姿を消してしまいます。

夜、法印が供養の願文を読み上げて回向（えこう）をしていると、紫式部の霊が舞いの衣裳を身につけた姿で現れます。法印の弔いによって罪が晴れた感謝をのべ、源氏物語の巻名を読み込んだ舞を舞うのでした。そもそも源氏物語とは、人々を仏の教えに導くための方便の夢物語として執筆されたものであり、書き上げた紫式部は、じつは石山寺の観音の化身であった、ということが舞によって明かされるのでした。

舞で謡われる詞章は、源氏物語の「桐壺」から「夢浮橋」までの巻名を並べて、仏の説く「無常」の世界観へと、見事に結びつけたものとなっています。